270

山岳遭難記 1

春日俊吉

百千の理由や・動機に弁明の辞があろうとも、
山で遭難事件を惹き起すこと一切が、
登山者（スキーヤー）の〝敗北の自認〟である。

一九一二年版『独墺山岳会報』より

―バウル・ウェデマッヘル―

まえがき

〝遭難ブーム〟という言葉がある。われわれ登山するものの側から考えると、まことに不埒千万・不愉快きわまる流行語だけれども、世上一般の冷たくて物好きな観方よりすれば、旧冬から今春にかけての頻発する山の遭難さわぎの実体は、まさしくブーム状態のそれであるかも知れない。山は（大自然は）強いのに、人間は（登山者は）弱少なのだから、たたかってわれわれが敗れるのは当然であろう。一応はそう思ってあきらめてはみるものの、地上に残されて遭難者それぞれの不慮の死を悼むひとびとの悲しみ・嘆き・物心両様の損失の深さ・大きさに思いを馳せると、真に眼をおおわずにはいられない。

一九一〇年代のはじめのころ、一学生として木曾駒ガ岳に登って、たまたまあの山麓・中箕輪小学校パーティ九名の疲労死と、リーダー校長先生の悲痛きわまる〝殉節〟を知った私は、山の遭難事実の内蔵する悲壮感に打たれて、やみくもにその記録の一端を大学の学報に発表した。故島中雄作氏の好意ある推挙を得て、最初に『山の受難史』一二〇枚を中央公論誌に載せ

たのが、実に一九三〇年の七月号であった。爾来、ざっと三十年近い歳月が経つ。一千六百名を越す山の遭難者の〝紙上墓標〟が、いま私の手許にある。どんな想いで彼らは山で死んだのか？　山で死ぬのが果して本望だったか？　それとも悔恨だけが彼らの霊にのこっているのか？　哀惜の念もさることながら、私は諸多の感慨に胸かきむしらるるばかりである。

年期の入れ方はそのように長かろうとも、肝腎の仕事がヘマで浅くて、皮相でピンボケであってはおよそ噴飯ものだろう。掘りさげ方の不足・追及力の欠如・批判精神の薄弱さを私は羞じる。けれども終始一貫して、私はまず遭難者の宿命に涙をながし、残された遺族と〝共に泣く〟こころもちだけは忘れないつもりであった。遭難をして〝未発に〟終らしむる動因が、山で死ぬことの空しさへの省察が、当然、この涙と共感のうちに潜んでいることを信じたい。ただひと筋の祈念がそこにつながる。いつに変らぬ畏友・新島朋文堂主の友情に感謝して、自序とする。続いて問う下巻と共に、どうかせっかく御愛読賜わりたい。

一九五九年（昭和己亥の年）初春・東京郊外世田ケ谷上馬の閑居において

著　者

目次

まえがき……二
1 前穂東稜〝氷壁〟事件の実相……九
2 小渋川原に遺った赤いセーター……一五
3 三ツ峠岩場の哀憐二重唱……二三
4 北鎌にのこした〝稀代の遺書〟……二八
5 阿蘇北岳の春の大吹雪……三四
6 大聖寺平に消えゆくいのち……四一
7 谷川岳の女人登山哀傷譜……四七
8 西穂高稜線上の切り裂けた天幕……五三

9　劔沢南無の滝下の宙廻転……五九
10　北信濃雨飾山腹の雪上異変……六五
11　平標小屋に託すマスコット人形……七二
12　富士吉田大沢の荒れたける雪魔……八一
13　白峰北岳で切れたザックの紐……八七
14　芦別岳夫婦岩の〃業務致死〃事件……九二
15　雪の雲取尾根・月下の盲進……九八
16　白馬雪渓に捧げられる夾竹桃（きょうちくとう）……一〇五
17　大雪山・三の沼樹間の椿事……一一二
18　那須三本槍山稜上の陰雨……一一八
19　朝日連峰鳥原山の〃岳妖〃記……一二四
20　茨木画伯穂高にて〃失踪〃顚末……一三二
21　マチガ沢雪洞生活中の変異……一三九
22　北岳頂上のはからざりし落雷……一四五

23 雪崩狂う日高のペテガリ岳……一五七
24 甲斐アサヨ峰の胸打つ英雄児……一六九
25 陸奥の雪山に斃るるいのち十一……一七七
26 阿蘇鷲ガ峰の切れたザイル……一八九
27 伯耆大山の雪にベテラン逝く……一九七
28 岳川第三峰で〃山賊〃斃る……二〇六
29 〃単独行〃の巨星天井沢に消ゆ……二一三
30 秩父将監小屋の火のつかぬマッチ……二三一
31 奥牧野寒風山東馬谷の雨と霧……二三九
32 谷川岳幕岩の光輝ある敗北……二四〇
33 名ガイド佐伯宗作地獄谷に斃る……二四六

山岳遭難記

1

1　前穂東稜〝氷壁〟事件の実相

＊

問＝ナイロン製ザイルが、切れるはずなくして切れた。巧い小説家が巧みにこの事件に取材して、ベスト・セラー本を描いた？　答＝さよう、当分、解決のつかぬ事件のようである。

＊

昭和三十年（一九五五年）一月元旦の朝は晴れていた。又白池畔のテントからふりあおぐと、前穂高岳東南面の雪嶺は、この世のものならぬ美しさ、きびしさで人間に迫っている。くるならこいと、近づきがたい面貌をもって睨みつけている。故小島烏水先生ならば、独特な漢文系の名文で「晶々たる白兎が西北に走って」いると書いたかも知れない。主峰（第一峰）の右肩は垂直に流れ、二峰と三峰はやや小さな白いコブ、そこで大きくくびれて壮大な第四峰の隆起となる。

三重・岩稜会メンバー、雪の穂高周辺をめざして伊勢を発ったひとびとは十二名いたが、そのうちの前穂東壁をねらう尖鋭隊は合わせて三名、石原君リーダーとなってトップ、つぎが若い若山君、ラストが沢田君で用意すべてととのい、午前六時には早くもキャンプをあとにした。悲劇の主人公は、この隊の二番をうけたまわる若山五朗君だから、しばらくこの青年だけにスポット・ライトを当ててみよう。会の頭目、石岡繁雄君の末弟だ。

石岡長兄は旧八高山岳部のぱりぱりで、在学中はアルプスの岩場の精鋭として鳴っていた。学窓を去っても岩肌の魅惑がわすれられない。旧第八高等学校、いま改めて名古屋大学、そこの須賀太郎教授を顧問と仰いで、岩稜会（実働会員約五〇名）をつくって、なおさかんに北アや鈴鹿の岩場を匍ってきた。若山姓をついでいるけど繁雄さんの実弟五朗君、これがまたなかなかの頑ばり屋であって、岩がなみなみでなく強かった。

なにしろ昭和二十一年の夏、まだ小学校五年生のとき二人の兄貴につれられ、バスなどないから歩いて徳本峠をこえ、屏風岩をやろうという兄さんたちと一緒にテントに入

り、ぼくもぜひ屏風をのぼらせてくれとたのみ込み、それを思いとどめさせるために、二兄が大いに〝往生した〟という五朗君、それが三重大学生となるにおよんでいよいよ頑ばり屋の本性を発揮、二十九年二月には前穂の北稜をのぼって、見事にその頂上に立った。

この年（三十年）七月には北岳バットレスを、追いかけて八月には穂高の又白谷をやったほか、ひまさえあれば鈴鹿の御在所岩場でトレーニングを続けるといったあんばい、だから同行の石原・沢田君また岩稜会自慢のファイターだし、主将石岡長兄は愛弟五朗君の東壁アタックにも、技術的にはいささかの心配ももたなかった。が、なんとしたことか、このたびばかりは留守番役の繁雄チーフが、胸さわぎがしてしようがなかったという。

さて、三人は終始石原・若山・沢田のオーダーを変えず、大いにはりきって雪綾にいどみ、ずいぶんピッチをあげたつもりだけど当年は別して積雪が多く、ルート偵察・安全第一主義の忠実な確保などで意外な時間をくい、予定した登攀完了地点よりも、ほぼ四〇メートルほど下部で日没となった。しかも晴れたお元日の空も、暮れなずむころから急激に悪化して、気温は二五度—三〇度（推測）にさがり、降雪と若干の風をみた。

暴挙は無用と三者いずれも、狭い氷の棚ながらツエルト（パラシュート用羽二重製）にくるまって夜をあかす。二九〇〇メートルの氷上仮泊である。あくれば一月二日、幸いにしてお天気はさまでわるくない。七時半、ふたたび元気に行動にうつる。ビバークの棚から登攀約二五メートル、そこで、前面にほぼ一二・三メートルほどの反りかえった露岩につきあたる。トップ石原君、ためらうことなく真っ直線に、くだんの一枚岩を匍う。

ようやく、最上段の突出部までのぼったが、睡眠不足ですこし疲れているせいか、二本のザイルをにぎりながら、突出部に頭ひとつ持ちあげながら、腕の牽引力が足りなくてのぼりきれず、やむなく慎重にザイルをたよって二者の確歩地点（岩盤上）までおりてきた。かくてセコンドの若山君と交代、五朗君はリーダーの失敗を知って同じルートをとらず、右方ややななめ、沢田・石原君たちジッヘル地点から約六メートルほどのぼる。

ザイルは石原君が引っ返した突出部で、しっかり結ばれているし、もう片っ方は石原君、続いて沢田君が共に左肩から腋のしたへ、これまた大地崩るるとも、の気がまえで確保されている。若山君もし滑落するとしても、ふふん、墜ちたのかと微苦笑すればそれですむ状態にあった。ところが、事実はそうはいかなかったばっかりに、小説・映画〝氷壁事件〟が突発したのである、石原君たち四つの眼が喰い入るようにみつめている前で……。

すべらしたのは左足であった。あっという瞬間である。右から左したへ、二メートルも墜ちないうちに——ちょうど時計の振り子のように——半円をえがいてゆっくりまわったところで、左上方、突出部にしっかと結ばれていたザイルがぷつりと切れて速さを増し、おそらくは若山君の左足か、左腕の一部分かであろう、石原君の右の腿にちょっと触れたまま、たちまちのうちに下方岩壁方向にみえなくなってしまった。ときに八時二十五分！

ザイルがいかにあっさりと切れたか、それは第一確保者の石原君が最もよく知っている。墜落のとき、石原君はすこしもショックを感じなかったという。友の墜落と、想像もできにくいザイルの脆さにすっかり自信を失った両名は、爾後の行動をいっさい中絶して、現場にあって救援をまつこととした。第二夜も、風雪のうちに傷心の極の露営をし、シグナルによって翌一月三日の午後、無事に救いだされて同日薄暮、池畔のテントに帰着したのである。

二日夜、胸さわぎが払いのけられぬので、気晴らしにお子さんをつれて映画見物にでかけた長兄氏は、すぐ帰宅せよとの呼びだしにドキンとした。上高地から島々の警察電話、とぎれとぎれだが愛弟の死はわかる。残留部隊を急ぎ動員して三日早朝発、同夜十二時ふらふらになつて上高地の木村氏宅に入る。四日午後、ソリに運ばれて沢田・石原君帰還、涙のみ、凍傷で手も足も繃帯ずくめの両君の涙を他のパーティがふいてやる。

「あんな弱いザイルってあるものか」と、石原君が泣きながらいう。おりもおりニュースがはいった。暮れの二十九日、東京東雲山岳会の某君が明神岳登攀中、やっぱりナイロン・ザイルがなんのショックもなしにぷつりと切れ、雪の吹きだまりに、二本の足だけたてて上体をすっぽり埋没

させたよしである。あとで知ったことだが、穂高の涸沢で大阪市大パーティ某君も、ナイロン綱が切れてひどい目に遭ったというはなし。

七日まで、岩綾会隊員は躍気となって、墜ちたはずの他域一帯を捜索した。が、新雪はふかく、若山君の遺体のうえを両三度往復したらしのに、発見するのにいたらず、愛弟を雪にのこして石岡君たちもこの地を去った。沢渡でバスを待つ二時間を利用して、同君がこころみに問題のナイロン綱と麻ザイルとを交互にナタで切ってみた。ナイロンのはひと打ちでさっと切れる。麻製はゴジゴジと鋸みたいに引かないと容易に切断し得ない。

松本からの電話で各新聞が、ナイロン・ザイルは切れやすいか、という主題でさかんに会社（東京製綱）がわの意向を主にかきたてているという。ナイロンは麻よりも、三倍は強いはずだから、要はその綱が古かったか、傷があったか、あるいは取扱いがわるかったのだろうと、結論づけているとある。石岡長兄は激怒した。危険な風説だと心痛した。こんなふうでは第四・第五の切断遭難がおこるかも知れない。今は沈黙もやぶらねばならぬ。

松本へでた。夜行には時間がある。石岡君は手わけして七部のレポートをつくり、朝日・毎日・読売・中日・信毎各支局（通信部）に電話をかけて記者氏を呼び、レポを手交したがなぜかこれは一社すら採用してくれなかった。戦う必要がたしかにある。名古屋で知り合いの中日紙幹部氏に、一部を郵送した。さわぎは、この中日の報道から拡大し、十五日には朝日も「今日の問題」欄でとりあげ、十七日にはＮＨＫが「私達の言葉」で放送してくれた。

ラジオでかたったのは石岡君のご老人である。お父さんはそのものずばり、私の息子は「会社の新製品の試験台となって、あたら若い生命を落した」と、声ふるわせて叫んだ。会社もナイロン・ロープ（漁業用の綱類）までがたりと売れゆきが減り、おびただしい損害をうけた。ところで岩稜会では、どういうザイルをどうして買い、どんな具合いに使ったか？　問題はそこへ当然にしぼられてくる。石岡君にそれをききだそう。

日本山岳会の金坂理事も、たしかにナイロンは麻の三倍も強いと山の本に書いている。かならずしも会の全員がナイロンに賛成したとはいえない。石岡君がまず率先して、

業者K君から〝責任保証〟づきのもの八〇メートルを買いいれ、ただナイロン綱は紫外線にふれると弱くなりかたが早いという話もあったので、石原君たちは事件の朝、キャンバスの袋に入れて岩場にいどみ、いよいよ使用の直前に袋から出して使ったのである。

そのうち早大助教授の関根君（アフリカ遠征隊長）が雑誌『化学』へ、たいへんな説を発表した。いわく「ナイロンがそんなに弱いはずはない。だれもみていないことを幸いとして、実際は自分たちがザイルを傷つけていたのをかくし、罪を登山綱に転嫁したのではないか？」云々。これはひどい。これでは石原君たちが、故意に同行者若山君を殺したことにもなる。事態は愛弟の死をはなれて、ついにはなはだしく深刻な方向へ走りかけている。

石岡君は悶々のうちにも、いろいろな方法で残ったザイルの部分を実験してみた。関根助教授の放言は、推測からでた独断論だからしばらく不問に付してもいい。石岡君の実験はことごとく、ナイロンの弱さ、脆さのみを証明する。しかし科学者でない石岡君の主張が、どの程度まで世間で信頼されるかどうかは、心もとない限りである。たまたま二月上旬、大朝紙の主唱で日本山岳会関西支部長、応用物理専攻、大阪大学教授、登山用具研究の権威篠田博士らがナイロン・ザイルの検討会をひらくという。石岡君はとびあがった。

その前に同君は大阪でM運動具店のS君に会った。かつて山の雑誌『岳人』に、ナイロンを極力推賞したひとである。あえて頭文字（イニシアル）だけここに書く。そのS君がいう。いわく「ナイロンはなるほど岩角には弱い。現に篠田博士も東洋レーヨンの研究室で実験の結果、麻ザイルよりも一桁弱く、とくに問題の8ミリ強力ザイル（岩稜会購入の品）は麻綱の二十分の一の力しかもっていない、と私に言明された」云々。ようやく、話がここまで発展したと、おおいによろこんで二度目に当の篠田教授に会うと博士もいう。「メーカー東京製綱は売行きがおちて、ひどく貴君たちをうらんでいる。そして会社からも資金の提供があって、近く公開実験をやる予定だ。結果の発表はその席にゆずる。内容は貴君がたに有利であっても、会社側に好都合となるようなことは絶体にない——」云々。まさにS君の話の通

りであって、勝利は当然にわれわれのものと石岡君は欣喜雀躍した。ところが四月二十日、東京製綱蒲郡工場でひらかれた実験の結果は？

その前日、五朗君の遺体捜索にむかった石岡君たちが、前穂東壁の第二テラスに面した、天幕の前の雪上で読んだ中日紙の記事がすべてを語っていた。博士の発表は「――身体の重さの錘りをウインチで持ちあげ、四五度～九〇度の岩角からおろしてみたが、ザイルは切れず麻よりも数倍強かった――」と、実験費用百万円、多数の登山家・新聞記者たちもこれを承認したと六段ぬきで書いてある。驚くべきドンデン返し、失望の極みであった。

どうも割り切れぬ感じが先にたつ。しかし急には結論のメドもつかぬ問題らしいから、双方の論争にはたちいらぬこととして、その後の動きだけをひろっておこう。六月すえ、石岡君たちは石原君の名で、いったんナイロンの脆さを承知しながら、のちこれを翻えした篠田教授を〝名誉毀損罪〟で告訴した。そのうちに石岡君の父上は、七十四歳で痛憤のうちに病歿した。七月三十一日には、東壁直下のB沢雪中で若山君の遺体を発見した。

むろん、ザイルはがっしりと五朗君の亡骸に結ばれてあった。告訴は「当局としては追求できにくい」という理由で不起訴となった。そのうちに、この事件にふかく沈潜していた作家井上靖氏によって、ベスト・セラーズ〝氷壁〟が東西朝日紙にのりだした。山本富士子君らによる映画もいたく世評を呼んだ。小説も主人公のひとり小坂は穂高で墜ち、友人魚津は強引にナイロン・ザイルの実験を主張したため、会社をクビになり、小坂の墜死も一般には自殺とみとめられるストーリーである。